

小金井雑学大学

第 18 号 平成 23 年 1 月

だより

NPO 法人、申請中

代表理事 五十嵐京子

小金井雑学大学発足からまもなく十三年になります。十周年を過ぎた頃から、NPO 法人（特定非営利活動法人）の認証を得ることを考えてきました。折にふれお知らせなどをしてきたつもりですが、多くの方から知っていただきたいことですので、ご報告をさせていただきます。

昨年の春には、NPO 法人化に向けた設立趣意書を公表しました。これも理事会で数か月かけて練り上げたものです。昨年の公表から具体的な準備をはじめ、秋には新たに正会員を募集し、正会員による総会で NPO 法人化の意思を固め、事業計画や役員を承認していただき、十一月下旬に東京都に認証を得るための手続きをしました。四か

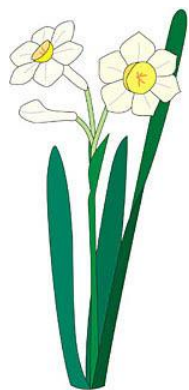
月で認証がおりることですので、今年三月末には NPO 法人として登録することになっております。四月三日予定の十三周年記念講演のときに報告できると思います。

NPO 法人になるメリットを一言で言うと、社会的な認知度があがるということになります。具体的には、例えば行政や民間から助成をもらう時や、あるいは行政からの委託事業をするといったことにも道が開けるでしょう。ただし、小金井雑学大学は今のところ大きな予算を必要とする事業をしていないので、助成の申請をする機会はありませんし、法人化することによる事務的な煩雑さも否めません。

それでも NPO 法人格をとろうと思っただのは、生涯学習の分野を大きな流れで見ると、日本全体の財政が厳しくなっている中、特にこの分野での行政支援は難しく、これからは市民



10月31日 NPO 法人小金井雑学大学設立総会が開かれました。（正会員のかたと）



の力がベースになっていくのではないかと思われるからです。生涯学習に限らず、福祉の分野等様々な公共的な分野で、これまで行政に任せていた仕事を市民と協働で行うことによって、新しい公共の概念を作り出そうという動きがあります。講演の企画など生涯学習の分野は、市民にとってもやりがいのある面白い分野だと思います。

小金井を拠点として、人材豊かな地域性を生かし、多くの住民が生涯学び続ける生活が出来るように、住民同士が時には学び、時には教えるという関係を作る場にしていきたいと思えます。

多摩の歴史シリーズを終えて

府中市文化振興課

文化財担当副主幹 江口桂

私は府中市の文化財を担当する職員として、市内に残されてきた貴重な歴史文化遺産の保存・活用を図ることで、市民のふるさと府中を愛する心を育み、伝統文化の継承に寄与する意識をもって仕事をしています。府中市の職員である以上それは当り前のことですが、市町村単位の地方行政制度が、私たち文化財を担当する職員の心に、隣接市町村に対する無意識な距離感を植えつけていることは間違いないと思います。例えば、よく見かける市の遺跡分布図、市域を越えて同じ時代の遺跡が広がっているのに、市境で遺跡がなくなっているように描かれていることもその表れの一つではないです。

しょうか。

しかし、今から1300年も前の古代の多摩に生きた人々にしてみれば、現代と同じような地方行政区分（国郡郷里制）に基づき、ある程度の地域単位のまとまりこそあったものの、少なくとも現代に生きる私たちと同じように、「府中市民」や「府中市の職員」という認識はなかったはずで、古代の人々には、自己の生活空間域を誰もがわかる山や川などが境界として漠然と認識され、その境界はよほど顕著な河川などが無い限り、観念的な空間領域として意識されていたに違いありません。

私たちが暮らす多摩地域は、水と緑豊かな景観に育まれた悠

久の人々の営みの歴史があります。こうした歴史の営みは、現代の細分化された地方公共団体の市町村域を境に、ぶつりと途切れるものではないはずです。

自己の属する市民のために日々働いている私たち「行政内研究者」とともに、市民の皆さんもそこに居住する自治体の市民ではありますが、自治体の範囲に縛られることなく、行政境を越えた多摩（武蔵国）の歴史文化を自由に学ぶことができ、そこに、私たち地域の歴史文化を担当する「行政内研究者」と地域の市民が協働で、多摩の歴史文化を学ぶ意義があるはずです。

小金井雑学大学の皆さんが多摩の歴史文化を学ぶ地域の核になっていただくことを願ってやみません。

市民が学ぶ地域の歴史

(財) たましん地域文化財団

歴史資料室長 保坂一房

ややもすれば、日頃の暮らしはきまった事の繰り返し、単調になりがちです。自宅から駅や職場、買い物や役所へ行くにも同じ道を通ります。同じ行動を繰り返すと人は飽きるようで、ときには気晴らしが必要です。むかしは生活共同体の結びつきが強く、みんなが参加する地域の行事が季節ごとに行われました。現在は人びとの生活スタイルや行動半径もまちまちで、それぞれが気晴らしを見つげる工夫が必要で、遠くへ出かける旅行などはその最たるものでしょう。

身近なところでは、まち歩きなども面白いかもしれませんが、通いなれた道を逸れて、あてずっぽうに歩いていきます。近所なのに来たことのない、知らない場所に行くわすれがありがたす。あるいは、むかしと景色が違ってしまったところもあります。そんな場所のことを、地図や本で確認します。地図といっても、現在のものに限りませんが、国土地理院発行の各時代の旧版地形図を並べると、場所の移り変わりが浮き上がってきます。江戸時代の古地図や錦絵に描かれているものと、現在の場所を比較してみるのも興味深いです。参考になるような本を、図書館で探すのもいいでしょう。図書館員に尋ねると親切に教えてくれますが、敢えて自分で調べられるのもお奨めです。すぐに目的

の事柄が見つからなくて、効率は悪いかもしれませんが、けれども、目的の事柄とは違う、思いがけない発見をすることがあります。「ああ、そうだったのか」と分かれると、とても嬉しくなります。寄り道も楽しいものです。私たちが地域の歴史を学ぶということ、暮らしの場を明らかにすることです。近所の寺や神社は土地の人たちが大切に守ってきた場所です。街道や用水、崖線や駅前の様子を記録すること、過去から受け継いだものを未来へ橋渡しすることになります。

これらの事柄を調べることは、住んでいる場所を知る楽しみをもたらします。そのことを知らない隣人に伝えるとき、教える楽しみが加わります。そこに人とのコミュニケーションが生まれ、地域のアイデンティティが育ってゆきます。そして、自ら

能動的に物事を学ぶ行為は日常の暮らしに気晴らし、それも一時のものではなく、持続的な潤いを与えてくれるのではないのでしょうか。



講義風景 5月 2日



歴史が刻まれた小道

府中市郷土の森博物館副館長 小野一之

一〇年程前にも小金井のある公民館で「貫井の今昔―武蔵野開発」という題で話をさせてもらったことがある。閑静な住宅街を会場めぐり歩いてみると、

途中のY字路に古い庚申の石仏があるのに気付いた。「右小川すな川道 左こくぶんじ道」と刻まれているので、歩いてきた小道は少なくとも江戸時代からあったことになる。国分寺道は甲州街道の宿場町であった府中に向かっている。

その後、府中の「くらやみ祭」を調べていくなかで貫井の方々にはたいへんお世話になり今日に至っている。貫井には有力な太鼓講中が古くからあったのである。皆それぞれの出立ちでかつてはこの道を使って府中の祭

礼に歩いて行ったそうである。国分寺道は大國魂神社のケヤキ並木につながっていた。

府中から小金井に分け入るように続いていた道もある。多摩川近くには政という大きな村があったが、近世以来の開発の過程で通是政・人見是政・小金井は政と呼ばれる飛び地を作っていた。これを貫く道をケイドウと呼び、一部は小金井街道として生きている。是政の古老と自転車でこの道をたどったことが以前あった。玉川上水の小金井橋近くにあったという記憶を頼りに、今の地図には記されていない。是政稲荷の小さな社を捜し当てた時の感激は共有できた。

そして、私にとって思い出深い「小金井雑学大学」は残暑厳

しい九月に行なわれたが、たくさんの方にお越しいただいた。

会場に近い交差点を曲がって坂を下りた正面に、金井原古戦場の碑がある。このあたりにかつて首塚・胴塚という塚があり、大國魂神社の古名をとった六所道が通っていたそうである。府中の分倍河原古戦場近くにも首塚・胴塚が残り、鎌倉街道上道が走っていた。中世の合戦は要地であった府中をターゲットにその周縁部で行なわれた。すると、小金井の前原町付近の小道は「もう一つの鎌倉街道」と呼ぶべきではないか。今回話をしている最中にそんなことを思いついたが、実際に口にしたかどうか、記憶にない。

十三周年記念講演のお知らせ

四月三日(日) 午後2時～3時

萌え木ホール(商工会館3階)

「私のメルヘン～絵と芝居の人生」

米倉 斉加年氏 (俳優)

講演終了後、希望者による祝賀懇親会(会費制)を予定。

編集後記

雑学便り第18号では、多摩の歴史シリーズの教授の江口さん、保坂さん、小野さんに原稿をお願いしました。お忙しいところありがとうございます。新しい試みの多摩シリーズは身近な郷土の歴史ということで、好評のうちに終わりました。

田中 留美子 記

発行責任者 五十嵐 京子

